
現代中国の知識人の思想分化とその政治的影響

蕭 功秦

<上海師範大学>

要 旨

本稿は、改革開放以降の現代中国社会における知識分子の思想分化およびそれが生み出した政治的影響に重点を置いて議論した。1980年代中頃の自由主義と新権威主義の論戦、1990年代の自由主義と新保守主義の合流、1990年以後の新左派の誕生および、新自由主義との論戦等、知識分子の思想分化は、毎回さまざまな程度において、それを受けた政治的影響を産みだした。筆者はとりわけ、その基本的思想理念や新左派の二つのタイプおよびそれぞれの特徴等を含む新左派知識分子の基本的状況について詳しく述べた。筆者は最後に、絶えず展開されてきた左派、右派の知識分子の思想闘争は、中国社会の将来の政治動向に対して、重要かつ持続的で微妙な政治的影響をもたらすだろうと指摘した。

キーワード 知識分子、自由主義、新権威主義、新左派、政治的影響

はじめに

1980年代から21世紀初めまでの20年あまりの間に、中国知識人は二度の思想分化を経験した。一度目は80年代末の自由主義と新権威主義との間の思想論戦であり、二度目は90年代以来の自由主義と新左派との間の思想論戦である。まさにこの二度の思想分化の基礎の上に、現在、中国の知識人の間で、中国がどの政治的選択と発展目標を採用すべきか及び一連の重要な国内外の問題の上で、自由派、新保守主義及び新左派が三つの異なる価値と思想傾向を形成している。

とりわけ注意に値するのは、1990年代中後期以来、社会の階層分化が日増しに明らかになるにつれて、また、経済の分化のプロセスの中であらわれた社会の不公平さが日増しに深刻になるにつれて、中国知識人の中の新左派の思想思考も日増しに活発になってきた。新左派は資本主義グローバル化を批判する角度から、公平、社会正義と平等の価値を訴えてきたが、彼らは現代中国の現実的な問題を資本主義の問題として、評価、認識しており、彼らは文化大革命の基本理念に対して、かなり積極的に肯定をし、現在の中国が市場経済に入り込み、グローバル化の主流に入り込んでいる全体の趨勢に疑問と挑戦を投げかけている。彼らは書籍を出版し、インターネット上でも互いに切磋しあい、国内外で意見を交換し合い、自由派知識人と論戦を交わしている。論戦の中で、主導的に攻勢をとり、自由派は往々にして守勢の側で呼応している。近年以来より、新左派は厳かに既に学术界において、自由派と拮抗する主な思想傾向の力となっている。

ある一つの新しい思想傾向の出現は、往々にして社会が直面している苦境を深刻に反映している。私たちはこの思想傾向に対する研究を通して、現代中国の近代化の転換時期に直面して

いる矛盾、問題、苦境を知ることができる。本稿は、新左派知識人の基本的思想観点、彼らの学理資源、理論根拠や主な代表人物を新左派の内部の穏健派と急進派、彼らの青年世代の吸引力はどこにあるのかについてや新左派思想の思想欠陥などを重点的に分析し、最後に本論文が中国知識人の思想分化が未来の中国政治の可能性に対する影響について若干の予測をする。

一人の思想研究者として、できるだけ客観的に彼らの思想発展の社会背景及びその思想の内存在ロジックを考察し、彼らの求める公平な道徳正義に対してできるだけ同情理解をするようにし、もう一方で、私はまた彼らの思想誤謬に対して理論的な批判思考を行わざるを得ない。最後に本論は中国知識人思想の分化と中国政治の未来が向かういくつかの可能性に対して若干の予測をたてたい。

1. 改革開放以来の自由派と新権威主義の争い

全体的に言うと、改革開放以来の中国の知識人の思想界はいくつかの段階を経ている。

(1) 改革初期の知識人の思想の同質性とプレート性

中国で、70年代後期に改革開放に入ってから、中国知識人思想界ではじめにあらわれたのは、一種のある価値態度、思考方式、政治方向性の同質性、同方向性とプレート性である。80年代では改革開放および全社会が文革で蒙った災難に対する反省をするにつれて、知識人たちは率先して人間の尊厳、価値、自由、啓蒙や思想解放を叫んできた。このような状況の下で、四人組の文化専制に対する反対、対外開放、市場経済の宣伝と民主政治の呼びかけはおのずと中国知識人と民衆の共通の追及すべき目標となった。知識界内部の個人の研究や注目している問題は偏ってはいるが、根本的な価値と目標の方向性に対する考え方の相違は、さほど突出してはいない。つまり、80年代は一つの民主啓蒙をもって知識人が共通認識をもった時代と言えよう。西単の民主の壁、潘曉が引き起こした人生観討論から時代を問うたテレビ番組『河殤』の出現までずっと、基本的に、当時の知識人の全体的価値や思想、観点の同質性を示してきた。当時、全国各地のあちこちで、各種のサロン（討論会）、大学が主催する各種講義あり、民間社会でも各種の思想学術討論がなされ、そこではほぼ同じ内容のことが話題になった。それは、極左思想路線のむしかえしに対する反対、思想解放と啓蒙、政治の民主的発展、経済開放と政治改革を積極的に支持することである。私たちは改革初期の知識人のこのような思想状態を同質性、プレート性、反体制の逆行性思想傾向とよぶことができよう。それは本質的に反文革専制の自由主義思想傾向に属する。

この同質性の思想傾向をもたらした原因は、全体主義の政治主義の下で、青年知識人が同様の閉鎖的な環境におかれ、同様の環境の刺激（文化大革命の打撃、生産隊に入り農村に住み着いての生活体験、四人組極左思想傾向と文化専制主義への反感、経済衰退、生活貧困が作り出した内外格差など）を受け、基本的に同質の社会構造の中で生活をし、明確な階層分化と利益対峙は存在しないのである。このような生存条件の同質性は、文革に対する逆行心理の同質性を招いた。これはまさに80年代の知識人の自由啓蒙思想傾向の社会心理状態の基礎なのである。つまり、80年代半ば以前の中国知識人はみな同質の思想解放派と言え、みな五四精神の申し子というわけである⁽¹⁾。私たちは、80年代初期の中国知識人の中のこのような自由思想傾

向を啓蒙思想傾向とよぶことができる。

(2) 第一次思想分化：自由派と新権威主義の争い

80年中期に入って、中国知識人の内部で第一次思想分化があらわれた。それはつまり自由派と新権威主義との争いである。この種の思想分化を生み出した原因は次の通りである。当時の早期自由派啓蒙思想は、思想解放と改革の宣伝において、忘れがたい歴史的貢献があった。しかし、一旦中国がどんな民主路線を選ぶべきかについておよぶと、このような特定の条件の下で、“思想解放”を目的とした自由主義思想傾向の弱点が明るみにでてきてしまった。中国の20世紀以来の自由啓蒙思想傾向は、家長制専制的な権威が個人自由を抑えつけたことに対して勃発した批判運動である。人々が民主を求める願いは、専制制圧の程度と正比例をなしたが、如何に民主政治実施に必要な社会経済条件を保障するかについてはそれほど注目していなかった。したがって、この民主思想傾向の支配下における政治選択は、つまり「専制を一掃し、多元的民主政治を実現する」ことであった。知識人は申し合わせたかのようにその場で次のような前提を受け入れるのである。それは、一つのどこにでも適用できる良好な制度が存在していることであり、つまり、先進的な民主と市場競争が結合しあった西洋的な民主モデルである。彼らからすれば、民主制度は、一枚の雨合羽を身につけているようなもので、雨を避けなければ、雨合羽を身につけるだけで問題を解決することができるのである。人々はあまねく、中国が多元的な民主政治といういい雨合羽を着ようとしなないのは思想が十分に開放されていないかまたは、すでに利益を得ている保守勢力の妨害であると考えている。したがって、知識人の使命は、啓蒙することと政治上の反民主的な保守勢力に抵抗することである。どのような社会経済環境が民主政治の安定的な成立に相応しいかについては、人々がまだこのことについて深い思考と注目はしていなかった。

指摘しなければならないのは、1980年代の中国知識人の中の自由啓蒙思想傾向の中では、比較的強烈な道徳主義の色合いが浸透していたことである。人々は普遍的にこの種の民主政治の道徳上における価値だけに注目して、このような民主体制が有効的に実施されるために必要な客観的社会条件には注目しなかった。このような自由民主思想傾向自体がロジック上潜在的な急進趨勢を持っているのである⁽²⁾。1980年代後半になり、価格上昇調整の挫折と経済領域の「官僚投機商」現象が氾濫するにつれて、知識人の中の焦燥感はさらに高まり、自由主義思想傾向も日増しに激化した。このような状況の下で、政治安定を強調する新権威主義は、自由主義激化の傾向に対する反動運動としてあらわれ、この思想傾向は漸進、安定と秩序をそのつとめとする。新権威主義は開明的な権威を利用して現代化を主導することを主張し、権威政治が保証する政治安定をもって経済発展を導き、経済発展をもって社会利益の分化を導き、そして社会利益の分化をもって契約的な人間関係を社会のつながりとして導くことを主張している。また、社会経済領域において広範囲的に利益の多元化があらわれ、利益団体の間に利益補填を基礎とするこのような契約的關係を築くことこそが民主政治の真の社会基礎であると考えている。彼らは民主が社会構造において実質的な変化が生じた後にこそ、中国に根を下すのである。まさにそうであることで、彼らにとって、新権威主義の開明的な専制の下での社会進歩が民主発展の前提であり、またそれが最終的に民主を実現させるための条件を作りあげるの

る⁽³⁾。

新権威主義の始まりは、直ちに当時の知識人の主流の自由な民主派の強烈な反発を引き起こした。自由派は、中国で未だ十分に専制主義の悪影響が清算されていないという現実の中で、新権威主義の出現は、「悪人の手先となり悪人のために働く」という役割を果たし、同時に中国を元に戻そうとする危険へと歩ませる。彼らは、人々がプロレタリア制権威の苦痛を受けた後、どんな理由でもう一度自分の命運を権威的統治者に託すのかと指摘している。彼らはまた、権威には危険性をはらんでおり、民主派の圧力を受け入れない権威は腐敗を免れることができないなどと考えていた。指摘すべきは、一つの社会がある権威体制がもたらした災難と危害の中から抜け出てきたばかりの時に、人々はいかなる権威政治に対する懸念も理解できるということである。

では、いかにこの思想論戦を理解するのだろうか。それは、この自由と権威の争いは、実際は20世紀初期の自由民主派と開明的な専制派との争いの歴史が続いているのである。新権威主義は、民主の過激化が権威と知識の瓦解を導き、現代化を失敗させると信じていた。それとは逆に民主派は新権威主義が理論上権威政治に合法的な資格を与え、元々制約をうけるべき権威が二度とコントロールを受けないようにさせると、かえって後ろ盾があつて恐れる物はなくなり、前よりいっそう悪くならないかと心配していた。前者は、「仮民主政治」がおそらく作り出した社会の無秩序な状態に対する心配から、また現代化の方向性を持った開明的な専制と新権威主義が保証する政治秩序を通し、それを基礎として漸進的に社会経済の変遷を推進し、同時に未来の民主政治のために基礎的な経済社会条件を造ることを要求した。後者は専制が個人自由への圧力に対する反抗から生まれたもので、一つの多元的な制御メカニズムを有する民主政体を作ることを要求した。

この二つの思想の間の衝突は、中国が自由民主を実現すべきかどうかという一つの最終目的にあったのではなく、どのような方法とプロセスをもってこそ、中国の民主を実現できるのかということにあった。新権威主義と早期の民主主義の思想論争は、自由派は個人的自由権利が保障を得ることを強調し、あわせて、政治権力が制度制限を受けることを要求し、そして新権威主義者は秩序と権威を強調した。また、双方の持つ、中国が最終的に民主自由をもつという目標の上には、根本的な食い違いはなかった。

(3) 九十年代の自由派の穏健化及び新保守主義との合流

89年の六四事件の後から90年代半ばまで、中国の自由派の知識人の主流は穏健化へと歩みはじめ、この変化の趨勢は、一方で旧ソ連東欧崩壊後の、急進的な政治と経済ショック療法は人々が予想するような成功を獲得したわけでもなく、旧ソビエトの経済の下落と重大な社会秩序の乱れは中国知識界が急進的な自由理念に対して、いま一度の反省をもたらした。中国知識人が、中国がいかに民主政治に向かうというこの重要な問題に対して、更に冷静で、更に現実主義的な態度をとり始めた。人々は次第に、体制内の漸進的変革の必要性と可能性を認めた。

その次に、92年の鄧小平の南方講話以後、知識人が社会分化のプロセスの中でかなり有利な地位に位置し、中国は「全国金儲け」の時代に入った。市場化の過程の中で、そのほかの労働者の階層と比べて、知識人の持てる知識能力は市場条件の下で、もっと容易に少ない資源(例

例えば、権力、地位、名望、財産)を獲得する「資本」であり、そこが90年代半ばの利益分化の過程で、知識人階層は最初に利益を得る階層であることを決定づけた。自由知識人の中で最も活力に溢れる一部の人は、非政治的空間の中で、今までにない経済利益を得、自己の価値を実現する新しいチャンスを見つけたのである。この点はそれらのかつて積極的に、急進的に西洋化を主張した自由派が穏健化へ次第に進めようとする最も重要な社会的原因である。この政治的穏健化がしめすのは、より多くの知識人たちには、目下、この政治保守的な条件の下での経済発展が、自分に対して利益があるだけではなく、同時に民族の進歩に対しても利益があるのと考えてるのである⁽⁴⁾。

利益上の変化という一点だけでは自由派知識人の穏健化を説明するには足りないが、実際には90年以来、イギリス、アメリカの政治哲学が知識人の中で次第に重視されはじめたことにもみな気づくだろう。もし、ごく少数の自由派知識人が80年代にハイエクやロールズの名を知っていたら、90年代にはこれらの名前と彼らの思想はすでに知識人の中では共通認識となっていた。自由派の知識人は広くハイエクの穏健な英米自由主義理論に触れ、受け入れはじめた。中国の自由派知識人もルソー式の過激な主義思想と文革極左思想の内在的ロジックの中から過激主義の危険性を意識し、自由派知識人である、朱学勤の『道徳理想国の覆滅』は他でもなく過激な自由主義の穏健化への思想の方向を表している。中国自由主義知識人が1980年代にルソー式の反専制型の過激な自由主義を崇拜し、90年代に入ってから、欧米式の穏健的な中産階級式自由主義に賛同することに転換した。これが基本的な流れである。

大部分において考えられているのは、90年代以降から、鄧小平の南方講話の後の対外開放の潮流があらわれるにつれて、同時に中国知識界での過激な自由主義思想が次第に薄れていくにつれて、“六四”以降、知識人が最も心配していた原理主義の復活は、あらわれることもなく、鄧小平が南方講話の中で強調した“反左優先論”は政務者のイデオロギーの核心的な言葉となった。これはまさに中国知識人が現行の権威政府に対して、二度と本来のあの強烈な対立感情を持たせることはなかった。一方で自由派も次第に民主政治が経済市場条件の支持を必要とすることに意識し、また一方で、新権威主義も制度建設の上での民主建設の重要性を軽視させないことに意識をし、実際ではすでに穏健な自由派とは明らかな違いもなくなっていた。このようにして、中国知識界の中での新権威主義と自由派との争いは、すでに本来のあの強烈な対峙は失っており、両者はあい折り合う方向にあった。自由派知識人の中間派(即ち穏健化した自由派知識人)と新保守主義(即ち新権威主義)が互いに融合し、民間社会の思想基本趨勢となった。つまり、一連の重大な問題の上で、これらの自由派の中の右翼と新保守主義とがかなり接近したのである。

2. 新左派誕生の背景及びその基本的思想理念

中国の社会問題に対する三種類の異なる態度

1990年代以来、市場経済の浸透につれて、中国は経済の飛躍的な発展を遂げたとともに、貧富の差、東西の経済力の差、金権取引、腐敗や社会の不公平などの問題も深刻化している。中国でかなりの影響力を持ったある学者は、以下で、中国の現状や将来に対して、多くの知識人が憂慮していることを述べている。氏によれば、中国はすでに富裕層が更に裕福になり、貧困

層が更に貧困になる段階に入っている。しかし、これらの階層は、技術革新や産業化のプロセスの中に誕生したわけではなく、独占条件による再生産で社会の財産を巻き上げている。これは中南米やタイの状況とはかなり似ている。全体から見れば、今後5年から10年の間、貧富の差の二極分化が予想される。社会資本を全体的に独占する富裕層は更に大金を設け、また同時に、農村部のみならず、一部分の都市人口も貧困の立場に追い込まれてしまうだろう、ということである。氏の話は、中国の現状について次のようにまとめている。中国では、改革開放政策が二十余年実施され、独占的、排他的な利益獲得の集団はすでに形成され、社会では貧富の二極分化がすでにあらわれている。中国は中南米各国の歩んだ道を繰り返す可能性が非常に高い。氏の挙げた問題は1990年代においては、かなり典型的な問題であり、この類の問題は、知識人の注目を集める中心的な問題となっている。⁽⁵⁾

社会制度の転換に伴う社会的不公平の出現や貧富の二極分化をどのようにみているのか、知識人の中には、三通りの意見がある。

一つ目は、知識人の中の新右翼的な意見だと言える。この意見によると、改革のプロセスにおける上述した種々の消極的な現象は、近代化過程では免れない代価である。現在、中国社会に存在する貧富の差や、企業の再編成や株式化のプロセスにおける「過程的な不公平」は、資源の市場化による合理的な分配で、最終的には、「結果的な公平」を遂げることができる。この意見によると、世界的に見ても、完璧な政治的選択がなく、現存するすべての問題や矛盾には、やむをえない事情がある。程度の差があっても、すべての発展途上国は、貧富の両極に分化するプロセスを経験しなければならない。腐敗も、経済が発展しているが、制度の健全が遅れているがためにあらわれた一時的な現象である。これらの問題は、権威体制のもとで解決できないわけではない。政治が安定している場合、権威主義の手段や、法律の健全によって、改革開放政策を引き続き推進し、市場経済の健全とともに、社会全体で努力すれば、これらの不公平な現象は徐々に消えていくに違いない。この主張によると、東アジアと中南米とは、国情や文化事情が異なり、中南米の二元化社会の国々と比べると、東アジア各国は、経済に対し、より強い調整能力を有している。中国では、経済の発展が保証できれば、制度の転換による種々な社会問題は、次第に解決されていくのであろう。中国は中南米の失敗を繰り返すことはあるまい。経済の発展にとっては、政治的安定が最も大切で、この安定した局面を破壊するすべての行為は、中華民族に対する無責任な行為である。この意見を主張する人には新権威主義者及び自由派右翼がある。

二つ目は、自由派中間派の意見である。この意見は、権力腐敗や貧富の差、及び分配の不均衡などの不公平に対し、かなり激しく批判している。しかし同時に、これらの問題は、市場運営の客観的規律によってあらわれたものではなく、指令経済から市場経済への移行において、権力が制約を受けていないがゆえあらわれたと主張している。あるいは、言い換えれば、権力が市場に介入したからこそ生じたのであり、政府の「見える足」がその「見えない手」を踏んだから生じたのである。新しくあらわれたすべての問題について、その元を正せば、過度の権力集中が特徴とした旧体制にある。当主張によると、民主化の政治改革を推進し、多元社会が権力に対する監督を強化し、民主によって腐敗と二極化を制約し、権力の独占地位を変えることが、問題解決の根本的な鍵である。

この二つの意見を比較してみると、両者は、市場経済を評価し、グローバル化の世界的傾向を認める点においては一致している。その相違点は、問題解決の道にある。前者は、権威の効率を上げることによって問題を解決すると主張しているが、後者は、民主化による制約で問題を解決すると主張している。

三つ目の意見は新左派の意見である。新左派は、経済発展の過程にあらわれたすべての不公平を、資本主義私有制による必然的な結果と見ている。この意見を次のようにまとめることができる。

一、中国は現在、実はすでに「資本主義社会」の状態にある。官僚の腐敗や社会の不公平さのその根源は、「国際資本主義の中国での拡張」にある。資本主義が問題の根源である以上、西洋左派が資本主義を批判する理論を借用して、例えば、従属的發展理論、ローマクラブやフランクフルト学派の理論などがそうであるが、これらは中国社会になぜ不公平な現象があらわれたのかを説明することができる。この主張によれば、「資本」とは、「人間性及び人間の尊厳に対する全面的な使役とコントロール」であると。一方、市場経済の実現は、「大多数の下層民衆の利益を犠牲にするという不公平が代価であることを意味している」。⁽⁶⁾

二、彼らは社会平等の価値観を相当強烈に求めている。新左派人士は公平な分配への強調、および弱者集団への同情から左翼の平均主義へと考えを転じた。新左派は平均主義方式に立ち返って“社会公正”の問題を解決しようと主張した。人間の強欲や汚職腐敗の横行は“私有制”に関連した必然的な産物である以上、人間の異化を防止するためには、平均社会主義の公平な分配を実現しなければならない。そして、公有制を前提に、下層民衆を民主管理に参加させるのである。

三、自分たちが、毛沢東が晩年に文化大革命を起こした意味と価値を「再認識」したと新左派が考えている。カナダ居留の新左派である、李憲源氏はネットで発表した文章で次のように述べている。「毛沢東は、革命時代後期における問題について、長きにわたって、孤立的で、しかもみんなに背かれそうな悲劇的な模索を行っていた。世紀の交代を迎える境目に、ついに後の人々の注目と共感を呼んだ。新左派の主張によれば、毛沢東が当時、文化大革命を起こす目的は、まさに「下からの上への」民主化革命や批判運動を通して、また、「プロレタリア階級独裁下におけるの継続革命」を通して、ブルジョア階級を批判し、資本主義が中国にあらわれるのを防ぐことにある。そして、毛沢東が起こした文化大革命の失敗は、左派の路線や思想理論の失敗を意味しているわけではないのである。中国は独自の社会主義道路を歩むべきだと主張している。ある新左派学者は、とある国際学術学会上で次のような世間を驚かす意見を発表した。「文革期とは、本当の民主が実現した時代であり、これは偉大な制度革新であったのである。もし、毛沢東の主張した道に沿って、文化大革命の道に沿って歩んでいたとすれば、我々は、西洋の資本主義国家と違う輝かしい道を切り開いたに違いない」と。新左派から見れば、中国の活路を開く方法は、現行の世界経済秩序と対抗し、現存のいかなる文明も経験したことのない新たな道を歩むことである。しかもこれは、大躍進や文化大革命など毛沢東の晩年の理論や実践からヒントを得られると主張している。

大体において、新左派を次のように定義できよう。新左派の思潮は、西洋の左翼社会主義思想の理論を土台とし、平等と公平をその核心価値としており、中国が市場経済へと移行する過

程にあらわれた社会の階層分化、社会規範の喪失や社会問題などを資本主義社会の矛盾の露呈として捉え、更に、平等主義を中国の問題解決にあたる基本的な選択にしているという社会思潮である。⁽⁷⁾

新左派知識人の基本的状況

新左派知識人は、学術的出身からみれば、三種類に分けることができる。一つ目は、人文学科特に文学批評の出身である。その理論根拠は、フランクフルト学派の理論とポストモダニズムの文学批評である。二つ目は、経済学の出身で、その理論根拠は、西洋左派の「従属発展」の経済学理論である。三つ目は反西洋の民族主義者で、「ポストコロニアリズム理論」、エドワード・サイード (Edward Said) のオリエンタリズムを理論根拠としている。無論、三つ目の民族主義者は前の両者とは、考えが完全に一致しているわけではない。しかし、中国と西洋との関係が悪化した際、彼らには、左翼的な面から自分の反西洋的な立場を強調する傾向がある。したがって、彼らを新左派の一員とみなすことができる。

全体から見れば、新左派の年齢は30代から40代の間であり、その大多数が大学や研究所に勤めている。1990年代末期、新左派は、中国で最も影響力のある人文学術雑誌『読書』と『天涯』において、益々多くの発言のチャンスを獲得した。しかも、一部の有名大学や、人文社会科学を専門とする学生の間でも、ある程度の影響力を持つようになった。彼らは、海外で、かなり影響力のあるホームページを作成しており、『中国と世界』はその中でもっとも影響力を持つものである。

大体において、彼らは現行体制のもとで政治に参加する興味や傾向がなく、ただ学者として、新たなイデオロギーの形成過程における参加者として、学術思想界で活動しているにすぎない。彼らの中には、ごく一部の人が、原理主義の左派、すなわち昔のイデオロギー官僚旧左派との間に不離不即の個人的な関係を持っている。彼らの社会主義回復という意見は、個人の間で、一部の旧左派主義者に高く評価されている。しかし、全体から見れば、新左派知識人と旧左派官僚との間には、政治的な一致や協力はみられない。

その原因としては、一つ目には改革開放が時代の趨勢となり、旧左派の社会的名誉がよくもなかったことが挙げられる。新左派がそれと一致していたら、自分たちの社会的名誉も損なわれてしまう恐れがある。しかも、天安門事件の後期においては、政治活動が厳格に制限され、このような合流は避けねばならない。二つ目には、西洋左派理論の更なる緻密な訓練を受けた新左派の博士たちにとっては、旧左派の教義はすでに理論的な魅力を失っていること。三つ目には、旧左派の「党官僚主義」のドグマ的な思想様式は、新左派のロマン主義の帯びた社会主義の価値観との間に、相当のギャップが存在していること。そして、四つ目に、新左派は主に「アカデミック」という環境の下に生まれたので、下層民衆とはあまり関わりがないこと。彼らは、下層民衆の利益の代弁者として政治に参加する意欲がないので、旧左派の持っている政治資源にもあまり興味がない。例え一部の新左派が政治参加に興味を持っていても、旧左派がすでに政治の中心から退けられていたので、利用可能な政治資源が少なかった。

総じていえば、新旧左派には、観念や価値観において、若干の通じる点があった。しかし、これまで、彼らの間には、政治的な結合点が存在もしていない。一般的には、若い新左派は、

書を著し、説を立てる学者であり、彼らは自主的な独立的な個人として思想界で日増しに活躍しているが、共同の政治願望を持ち、政治に参加する社会団体にはなっていない。

3. 穏健と急進：新左派の二つのタイプ

新左派主義者の思想状態や観念からみれば、その理論根拠の違いや価値観の傾向の違い、及び心境や経験の違いによって、穏健派と急進派という二つのタイプに分けることができる。この二つのタイプを区別して捉えることは、その未来の政治傾向を研究するにあたっては大切である。

(1) 穏健型の新左派：ポストモダニズム型

このタイプの理論根拠及び注目の核心価値から言えば、それに、ポストモダニズムの価値観で中国の問題を解説するという考え方から言えば、このタイプを「ポストモダニズム型」新左派と呼ぶことができる。このタイプの新左派のポイントは、国際市場経済のグローバル化傾向によって、資本主義社会に存在する矛盾や問題は、現在の中国の社会生活や精神生活にも同様に、あらわれていることにある。それで、彼らは、西洋の新左翼思想運動の理論やポストモダニズムの理論を用いて、中国の現実について批判・反省をしようとしている。彼らは、西洋の発達した資本主義がもたらした人間の疎外や、市場経済の過度な膨張がもたらした消極的な結果という角度から出発し、西洋の様式と異なる新社会を作ろうという願望を表している。主な代表人物には、汪暉、崔之元、甘陽、王紹光などがいる。

彼らによると、中国はすでに世界資本主義市場の流れに入り込んでいる以上、資本主義の膨張を制約するにあたって、過度の市場化を防止するための歴史的流れが同様に必要となる。彼らは、500 以上もの団体が参加したアメリカ、シアトルでのデモから、デモの参加者が打ち出した「世界は商品ではない」というスローガンから勇気を汲み取った。そこから、彼らは「左翼の貴重な伝統の再現」を確認した。彼らから見れば、この左翼の伝統は世界的な普遍的な意義を有している。つまり、弱者の結束、国際主義、反権威、反独裁、反搾取、及び人類世界の異化と商品化への反対などである。彼らは、1968 年西洋の学生運動における消費社会に対する批判の中から精神的な支えを獲得し、「人間を単純な消費者にみなすことに反対する」と呼びかけている。⁽⁸⁾

特に指摘すべきは、新左派が、サイドの「オリエンタリズム」から重要な理論根拠を獲得したことである。彼らは、旧左派が使用したイデオロギーの反帝国主義を用いず、オリエンタリズムを自分の根本理論としている。サイドは、当代フランスの思想家ミッシェル・フーコー (Michel Foucault) やジャック・デリダ (Jacques Derrida) が出した知識と権勢、真実と言語、表現と歪曲などについての論述を、『オリエンタリズム』という本の方法論の基本にしていた。サイドによれば、フーコーとデリダは、次のような重要な思想的貢献をしている。例えば、言語は本質を伝えることができず、表現には歪曲が付き物であり、叙述は真理を表すことができない。主体は客体を必要とするのは、自身を検証するためであり、相手を理解するためではない。いかなる知識には想像的な部分を含めている。知識が権力をもたらしてくるが、更なる強い権力は更なる多くの知識を求めている。知識は、主体が客体を征服する道具であり、

知識は覇権そのものであるなどの考えがそうである。サイドは以上の抽象的な論述を自分の学術論証に引用し、『オリエンタリズム』の論述で、次のように述べている。西洋は主体で、東洋は客体である。西洋が東洋に関して行う学問は、西洋という主体が東洋という客体を征服する過程に生じる産物である。西洋が東洋に関する描出は、学術著作においても、文芸作品においても、その姿がねじまげられている。東洋は常に野蛮なものや、醜いもの、あるいは弱いものや、女性的なものとされたり、異国情緒にあれたものとされたりしている。

サイドから見れば、この一定の型にはめられた東洋に関するイメージは、西洋が自ら作ったものである。これら種々の歪曲によって、東洋のイメージはすでに真実から離れている。西洋は、植民拡張のために、西洋が全面的において東洋に勝っているという神話を作っただけである。よって、西洋が東洋に対する侮辱、侵略や征服には、合理的な理論的根拠をつけ、西洋が東洋に対する暴行に合理的な、正義化された口実をつける。サイドは、西洋人が東洋人に対する傲慢な心理、西洋が学術や文芸作品での東洋に対する歪曲、及び西洋が東洋における植民活動を総じて、「オリエンタリズム」と名づけた。⁽⁹⁾

サイドが西洋植民主義の言説に対する批判は、新左派に強力な思想的、理論的道具を提供してくれた。これは、旧左派のイデオロギーの反帝国主義の言説より遥かに強い。新左派はこれに基づいて論を打ち出した。彼らによると、西洋から発端した民主、自由、人権、近代化、市場経済、グローバル化、知的財産権問題などは、いずれも新植民主義者が文化において第三世界を征服する概念的道具である。中国人は、これらの西洋式の言説を以って、中国が国際社会に参入したという歴史的選択を論証すれば、それは、西洋の是非判断を認め、西洋人の要請と暗示にしたがって行動することとなる。その結果、西洋権勢の発想や植民の発想に挑戦し、それを拒絶する立場を根本的に失ってしまうに決まっている。最も重要なのは、我々は不幸なことに西洋人によって生み出されたオリエンタリズムの発想の環境の中に生き、それによって、中国の主体性を根本的に失ってしまうと新左派は考えている。新左派は、西洋権勢の発想から脱却した中国自らの「抵抗の言説」を打ち立てることを自らの務めとしている。新左派は、サイドの「オリエンタリズム」を受け入れることによって、中国が西洋に学んで、市場経済化、民主自由化及び近代化を実行する歴史的選択を否定している。

このタイプの新左派がインターネットで発表した意見から、その基本的な特徴を概括することができる。彼らは、ポストモダニズムやポストコロニアリズムの立場に立って、資本主義の文化的矛盾を批判する角度から、自分の左派主義の主張を行っている。彼らによると、中国に現存している、あるいはかつて存在していた問題は、まさに、西洋国家の資本主義の矛盾をあらわしている。彼らは、西洋文化における反西洋的発想から、中国が近代化の道を歩む理論的根拠を探している。

このタイプの新左派が強調する二つ目の面は、国の力で経済生活に関与し、それによって自由放任主義の社会の弱者集団に対する侵害を防止することである。彼らは、自由競争に対して、大きな疑いを持っている。市場経済は国と社会の力によって制約され、調整されなければならないと主張している。近年東欧やロシアにあらわれた「自由主義」は、その本質は、大多数の人を略奪することを代価として、少数の人の自由をもたらずと考えている。彼らは、ロシアの経済改革における規範の喪失や秩序の崩壊などを「略奪性資本主義」と概括している。まさに

そうであるために、このタイプの左派は、国家の社会関与によって公平な分配を実現すると主張しているため、彼らを「社会民主主義型」の新左派とよぶことができる。

このタイプの新左派主義者は、中国に現存する問題が先進国の資本主義国家における基本的な問題に似通っていると考えている。したがって、彼らの文章には、西洋から取り入れた最も流行の新左翼思想理論の概念が溢れている。例えば、フランクフルト学派、女性主義、勤務場所の人道主義化である。これらは、「文化主権」を要求し、「本土の文化を尊重し、文化の商品化を反対し、西洋で流行っている「近代性」、「ポストフォード主義」を反対している。彼らは、過度の資本主義化の人間性に対する抑圧や人間の疎外に反対し、中国がグローバル化のプロセスにおいて「一つの同質化と金融と政治寡頭が主導する世界をうけいれる」ことに反対している。この意見は、彼らが繰り返して強調する基本的なテーマであり、インターネットでは、いつもこれに関する説を目にすることができる。⁽¹⁰⁾

学術風格からも、この穏健左派の特徴が見られる。次節で取り上げる急進左派と比べると、彼らの文章の風格は比較的「貴族的」である。彼らの文章の言葉遣いが難しい（この点においては、汪暉が特に目立つので）、一般民衆にとっては理解しがたく、彼らの高論にはあまり興味を示さない。彼らもまた民衆が自分の考えを理解しているかどうかに対しては気にかけていない。彼らは論文では民衆的な民主を強調しているけれども、これらの理論を社会的実践に利用することは一度も考えたことがなく、民衆に対し、思想的・理念的の呼びかけをかつて一度も行ったことがない。穏健型の新左派の大多数は大学や研究所に勤めているアカデミー学派である。

ここで指摘すべきは、この穏健型の新左派の一部の思想観念は、合理性を有し、積極的な役割が期待できる。中国は発展途上国であるが、経済のグローバル化のために、西洋の先進国に存在する一部の問題が中国社会にもあらわれ、しかも益々顕著となっているからである。中国の問題を論じる時、資本主義のグローバル化の背景を無視してはいけないと彼らが意識している。もし、彼らの左翼理想主義がこれほど現実から離れていなければ、グローバル化のプロセスにあらわれてくる偏りに、ある程度の警告と矯正の役割が果たせると考える。

一方、彼らの致命傷としては、アカデミー学派の書生っぽさや左翼的な持ち込み主義が挙げられる。事実、彼らの生活は、「西洋訳語の世界」に溺れ、抜け出すことができない。ある自由派人士は、新左派を次のように巧みに皮肉っている。「ポストモダニズム」の理論で近代化の道に踏み出したばかりの中国を制約するのは、まさに「やせすぎの人にダイエットをさせる」ことや「赤ちゃんに避妊薬を配る」ことと同じである。更に、この穏健左派の考え方には、文化浪漫主義の審美的心境によって、文化大革命のときの平均主義や、計画経済体制、及び人民公社・大躍進などに対する誤解がある。「腐朽を奇跡に化す」という彼らの態度は、ある条件のもとでは、旧左派の伝統的思潮の復活に、助長する力となっている。

（2）急進型新左派：ナロードニキ型

ここでの分析は、急進型の新左派に焦点を置くことにする。穏健型と比べると、現在の中国では、このタイプの新左派が、更なる消極性や危険性を有している。彼らは、秩序の崩壊や規範の喪失によって、市場経済の推進や自由競争のプロセスにあらわれた現実の生活におけるマ

イナスの現象を過度に誇張している。しかも、このようなマイナス面を資本主義の本質のあらわれとして捉えている。こういう悲観的な認識に基づいて、彼らは、感情的・思想的には現実に対して更なる疎外感を感じている。更に、もっと情緒的、急進的、且左翼的な社会批判意識をなしている。彼らから見れば、中国はすでに資本主義化されており、中国の民衆はすでに資本家にこき使われる奴隷となっている。この派の代表人物には、清華大学の若手教師である曠新年、北京大学中文系の若手教師である韓毓海、民間の音楽関係者である張広天（劇『チェ・ゲバラ』の監督）、北京学術雑誌の編集者である黄紀蘇（『チェ・ゲバラ』のシナリオライター）などがある。

前にも取り上げた新左派主義者李憲源がインターネットで発表した次の話は、彼らの典型的な心理状態や思想が表れている。

「海外の華人新聞や国内外のメールマガジンに掲載された中国の弱者集団を取り巻く悲惨な境遇についての報道を読むたびに、資本家に閉じ込められ、燃え盛っている炎の中でもがいている生命のこと、仕事の現場で疲れ果てて死んでしまう女性労働者のことなどを読むたびに、そして、『人民文学』に載せた高度な典型化によって概括された涙を催すほど感動的な主人公の遭遇や運命を読むたびに、更に、改革はもともと、中国の民衆が2000年までに一定の裕福な生活を送ることが目標であったが、その結果は数え切れないほどの弱者がリストラされ、強者や成金が飲んでいる洋酒一本の価格と同じくらいのお金で、かろうじて一ヶ月の生活を維持していること、これらを考えると心苦しい。西洋の貧富の差における非常に偏った状況はすでに見慣れているが、祖国の同胞の身にもこのような、更にこれよりもひどい状況が起きていることを思うと、しかも、中国が国際的な注目を寄せた経済成長を遂げ、膨大な富を生む今日に起きていると思うと、私は深く反省せねばならぬと思う。中国知識人の社会的責任感と社会的良心を問わねばならない」と。

この話は、新左派知識人が社会の下層階級のために声をあげるという強い道義的な責任感を表している。大体において、このタイプの新左派の特徴を次のように概括できる。

①強い下層意識、反知性主義とナロードニキ主義の傾向

彼らの経歴から見れば、社会の下層階級から出身した人や、西洋で留学していたとき、自由競争のプレッシャーで深刻な蹉跌を味わい、それで資本主義市場経済に嫌悪感を抱くようになった人が少なくない。彼らは、国内あるいは海外で、多かれ少なかれ主流社会に軽蔑されたマージナルな経験をもっている。下層社会での生活体験と挫折感から、限られた資源を独占するエリート階層に対し、激しい抵抗、懐疑、及び憎悪の念が生まれた。社会の不公平を目にするたびに、彼らは、個人的な挫折と社会的な不公平と結びつけて考える。自分が「下層民衆の利益の代表」であると考え、「民衆のために命乞いをする」というような使命感が生まれた。

このような「下層意識」によって、彼らは、知識人のエリート層に対して、本能的に強い不信感を抱いている。自由派知識人の主流が、中国の市場経済の合理性を認めている。彼らはそれを理由に、知識人のエリート層が権力者や有産階級とはすでに「ぐるになって悪事をはたらく」関係になっていることを確信しており、民衆をこき使う「ごますり文人」となったとしている。

ここでは、一人の急進型の新左派主義者を例にとってみよう。彼は、貧しい家庭に生まれ、幼い頃から度々不公平な扱いをされてきた。大学卒業後、彼は、非常に立ち遅れているところに教師として派遣された。生活における種々な挫折と不幸を味わい、彼の内心には終始、社会からつまはじきにされた人間としての社会反抗の強い感情を持っている。このような心理と挫折体験は当時のポル・ポトに似ている。この下層意識は、彼に強烈な反知識人の感情を抱かせた。彼は自由派との論戦のためにインターネットで文章を発表し、驚くことに次のように述べている。「中国には自由主義などない。ファシズム主義しかないのだ」と。また、自由派が「私用に使った公的な財産」や汚職で流用した公金を戻すべきだなどと述べ、長々と続く文章は、全篇にわたって論戦相手に対する人身攻撃や蔑視に満ちていた。

無論、つまはじきにされた下層階級でも、誰もが新左派になるというわけではない。次に挙げる青年学者も、貧しい家庭の出身であるが、強い自由主義的傾向を持っている。彼は、上で述べた新左派主義者に対して、次のように批判している。

「私の出身も農民の家で、家族ははまだ農村にいる。現在、農民は社会の最下層にあり、しかも代弁者が足りない。しかし、農民のこの運命は市場経済がもたらしたものではなく、集団主義経済に戻れば改善されるものでもまったくない。むしろ、集団主義経済の時代において、農民の運命はもっと悲惨だったのである。記憶の中の集団主義経済の時代は、生産「隊長」は、小説に描かれるような解放前の悪人や地主のような存在である。隊長の権力はこの上なく高く、すべての人の「工分（労働点数）」や政治的地位を支配している。誰にどのくらいの「工分」を分配するのか、誰を「批闘（批判闘争）」するのか、誰が外へ出て物乞いをしていけないのか（物乞いをするためには、隊長の証明書をもらわなければならない）、これらはすべて隊長の言うがままであった。農民はこのようにおさえつけられた中で、お腹いっぱい食べることもなく、身体を十分覆う服もなく、尊厳も自衛する能力もない…。こんな境遇にいた家族のことや、祖父や祖母が受けた非人道的な扱いを考えるたびに、私は涙を流してしまう。これが新左派の渴望する平等なのか。農民が期待しているのは、新左派が主張している通り一遍のものではなく、自由であり、階級制度から解放された真の自由なのである。都会の人には二度と農民を追い出す権利はなく、農民は、この土地で自由に移動したりすることができ、自分たちの国で、この大地で自由に動くことができる権力を有する。このことが何よりも大切である」と。

この例から、「下層意識」によって、一部分の人は自由派になり、もう一部分の人は急進型新左派になることが分かる。後者の出現について、次のような原因が挙げられる。急進型の新左派は、自由主義では中国の下層社会に存在する問題が解決できなく、左翼的な庶民革命だけが下層民衆に自由をもたらすことができると考えている。彼らからみれば、土豪や悪質な地主のような農村幹部や、ごろつきやチンピラに溢れた社会においては、穏健な自由主義は何の意味もない。したがって、左派の庶民革命の理論は、「束縛を突き破る」という強い意欲を最もリアルに表わしている。このような心理状態や思想は、20世紀初頭、蔡和森など初代の共産党人の思想には存在していた。この点において、海外の新移民の中に生まれた新左派も同じようなことが言える。彼らは、西洋に移民してから、ずっとマージナルにある。その中の一人は、自分の新左翼的思想が、西洋の資本家に搾取されたショックから生まれたと話している。ある急進型の新左派主義者が、インターネットに発表した論戦のための文章の中に、次のような極

端な考えを述べている。

「我々は、自由主義を叫んでいる一団と向かいあっている。彼らは実は、野蛮で、残酷な、人間性のない奴隷制を実行しようとしている。そしてまた、ファシズムを実行しようとしている。したがって、私が自由主義、資本主義に反対しているというより、むしろ、奴隷制、ファシズムに反対しているといったほうが正しく、自由主義の権威主義化とファシズム化に反対するのだ。1789年の陣地を守る、フランス革命の最後の陣地を守るのだ。この陣地に「自由」、「平等」、「博愛」を刻もう。我々は、これらの歴史の進歩を物語る陣地からいつまでも退くわけにはいかないのだ」と。

彼らは、知識人の主流に対して、極度に蔑視をしているが、同時に民衆を純潔で、優秀で、少しの汚れもないものとして捉えている。民衆は生まれつきながら革命的精神を有しているのだ。この急進型新左派は、毛沢東文化大革命の時代のナロードニキ主義革命感を受け継いでおり、「卑賤な者は最も聡明であり、高貴な者は最も愚かだ」という言い方は、十分に理解できるものである。この反エリート主義のナロードニキ主義思想は、今年北京で上演された『チェ・ゲバラ』という新左派思想に満ちた劇に十分に表れている。この劇には、「足」と自覚する伐採業労働者が「脳」と自任する支配者を叱責し、嘲弄する理論が見られる。劇の作者の描写において、民族の奇跡的な発展を遂げるために取り組んでいるとうぬぼれている知識人は、まさに特権階級の共犯者であり、更に新たな統治者そのものである。

彼らは下層意識から毛沢東を理解しているので、毛沢東を庶民主義革命の聖人として美化している。文化大革命を起こした毛沢東のユートピア思想や、文化大革命が中国国民にもたらした苦難などに対しては、いささかの批判や反省もない。彼らは真実の毛沢東についてはすでに興味がなく、彼らの興味は、彼らによって美化された毛沢東に自分の文化浪漫主義を託すことにある。この点は、『チェ・ゲバラ』の監督である張広天が「ある紅小兵」という名でインターネットに発表した『毛沢東の位牌に向かって』という文章からはっきりみてとれる。

②強烈な反西洋的情緒

彼らの中には、かなり多くの人が西洋で留学する経験があり、西洋で挫折を経験した。中産階級に入って成功した留学生と比べると、彼らは西洋資本主義社会のマイナス面をより深く実感していた。このような体験によって、彼らは中国が将来、西洋式の社会となる現実的な可能性を心理的にはとても受け入れがたいものであった。劇『チェ・ゲバラ』の作者黄紀蘇は、アメリカ留学の経験がある。彼はアメリカでの感想を次のように話している。「アメリカの小さなレストランのうらで、18時間連続で皿洗いをしていた時、高々と積まれた皿の山を見て、その時感じたアメリカとレストランでエレガントな音楽の中で感じたアメリカとはまったく違う」と。彼らは、このように切実な体験を中国の現実を投影し、新左派の信念を形成した。穏健左派の中にも、反西洋的な情緒を持っている人がいるが、その強さは、後者とは比べものにならない。

③道徳的優越感に基づく闘争哲学

自分たちの手には真理を把握しているという自信があるから、彼らは、強い道徳的優越感を

持っている。彼らは、道徳上、すべての物事を「善か悪か」という両極端に分けている。自分たちが民衆の立場に立っているので、自分のたち意見に反対する者は、「道徳上の邪悪」と捉えるしかない。「邪悪勢力」に対しては、民衆の利益のため、徹底的な闘争を行わなければならない。この独断的な考え方によって、彼らにはきわめて寛大な心を持っておらず、激しい剣幕で迫る。清華大学社会系の青年教師である曠新年は、毛沢東の「破壊——失敗——再破壊——再失敗——滅亡に至る」という言葉で自由派を攻撃している。

これは決して個人的な学術風格の問題ではない。急進左派特有の「道徳的優越感に基づく闘争哲学」の共通的特徴をあらわしている。昔、蔡和森がフランス留学をしていた時に、かつて次のような意見を発表した。中国では、十万、二十万の資産を持つプチブルを対象とするロシア式の革命を行わなければならない。「大きな反響を呼んだとしても、やらざるをえない」と。この発想も、「善悪両極」のとらえ方に関係がある。ポル・ポト式の革命的情熱や、彼らの宣伝するゲバラの精神は、いずれも急進左派主義の考え方を受け継いでいると言えよう。

このような人々は、革命への強い執着を持っている。原因の一つとして、潜在意識における左派共産党文化の蓄積が挙げられる。社会において、二極分化の現象が発生した場合、とりわけ、それは彼らの考える「不公平」な社会貧富の分化である場合、伝統的な「金持ちの財産を奪い、貧乏人を救済する」という平等主義が、共産政治文化に潜むこの伝統的な要素を引き起こす。彼らの思想についての研究を通して、中国の暴民政治・革命が起きた思想構造を理解することができる。この意味からいえば、彼らは、左翼革命思想の「生きた化石」と言えよう。

④ ジャコバン派のような民衆動員の衝動

上で述べたように、急進型の新左派には、下層意識や、反エリート主義のナロードニキ主義傾向、及び道徳的優越感に基づく闘争哲学を持っており、西洋を自分と対立している存在として意識し、それを邪悪な敵として捉えている。したがって、ロジック的には、このような人が、民衆を動員して「公平な社会」を実現することに対し、強い興味を持つのは当然のことである。このような新左派主義者は実質上、暴民政治の革命傾向や、下層革命の意識、民衆動員に訴えるという内心の感情を持っている。彼らの文章には、初期の共産主義革命における語彙と記号が溢れている。

この点においては、「ポストモダニズム」の価値観を認める穏健型とは異なっており、前述した穏健型新左派は大抵、西洋の大学のキャンパス内で中流階級の生活を楽しんでいる。彼らには、「貴族化」、「インテリ化」、そして書齋的なアカデミズム傾向を持っている。しかし、ナロードニキ主義新左派には、下層出身の経歴や西洋での挫折感があるので、彼らには、下から上に、「資本主義」を反対する革命的動員の感情を持っている。彼らが最も興味を感じているのは、民衆の感情である。彼らは、資本家に搾取される中国の民衆は自分たちと同じ立場に立っていると信じている。穏健左派が堅苦しい理論の世界で楽しんでいるとすれば、急進左派の文章の風格は相当通俗的だと言える。彼らの中で、例えば、黄紀蘇は、より通俗的な文学様式で自分の主張を宣伝しようとしている一人である。同時に、彼らは、民衆の感情や反応を通して自分の存在価値をあらわしている。だからこそ、彼らはゲバラという歴史的人物を自分の偶像とするのも偶然ではない。実は、新左派が作成した海外のサイトにおいて、国内で労働者独

立運動に携わっている下層労働者とサイト作成者とのやりとりが見られる。海外の急進型の新左派は、政治見解の異なる下層労働者とはすでにある種の結びつきをみつけている。当然、国内の急進型の新左派は、中国の政治のルールを限度をよく分かっているため、民衆とやりとりをしている形跡はない。

急進型の新左派の社会的影響については、劇『チェ・ゲバラ』の社会的反響から読み取ることができる。2000年4月から5月までの間、北京小劇場で、『チェ・ゲバラ』⁽¹¹⁾が上演され、予想以上の反響をよんだ。この劇は37回にもわたって上演され、平均動員率は120%に達し、あわせてのべ1万人あまりの観衆を集めた。通路まで観衆でいっぱいになったこともあり、遅れてきた観衆が立って見ている場合も少なくなかった。まさにメディアの報道した「火爆（爆発的大ヒット）」その通りである。とある大学生たちは、この劇を見るために、わざわざ瀋陽から10人あまりの団体に北京へとやってきたという。顔を涙でいっぱいにした観衆もいるし、リピーターも多く、五、六回も見た人も少なくない。更に多く、12回も見た人さえもいたようだ。劇場は毎回、高揚した雰囲気にも包まれた。この劇の上演は、新左派思潮が初めて文学芸術の舞台上で登場し、民間に入ったことを示している。観衆の主体は北京の大学生で、退職した元幹部や旧左派人士も次々に見に来ていた。

この劇の上演後、自由派知識人と新左派の間で、この劇についての論戦が起こった。一部の自由派知識人によると、ゲバラの本質はまさにポル・ポトと同じであり、ただし、誤りを犯すことに間に合わなかっただけである。しかし、劇の作者である黄紀蘇は自分が大切に思っているのはゲバラのシンボリック的意義であるという。彼によれば、ゲバラという人物に、精神と文化の力が表れている。不公平な社会においては、ゲバラの精神は新たな価値を持っており、市場経済の異化を防ぐ消毒剤のようなものである。彼は、更にゲバラという人物には決められたルールに反抗する道徳的な力を持っていると考えている。一般的に見れば、すべての主義は、必然性やルールの前では頭を下げなければならない。なぜなら、ルールは背くことのできないものだからと思われる。しかし、ゲバラは、もしルールが人間性に合わなければ、それにそむかなければならないと話した。「人間は、このような抗争の中で、本当の偉大さを表すのだ。我々はすべての非人道的な社会に反対し、たとえそれがルールや必然性に符合するか否かにかかわらず反対する。それは正義がルールより尊いからである」と。⁽¹²⁾

この劇には、現存の秩序に反逆するナロードニキ主義の傾向がある。これについて、あるネットライターが次のように批判している。この劇の中心的内容は、すべての人間を金持ちと貧乏人という二種類に分けることである。金持ちは道徳的には墮落しており、邪悪的である。貧乏人は善良で、純潔で、道徳的には高尚である。貧乏人が金持ちを対象とする革命を行うのがあたりまえのことで、正義的なことである。このテーマは二重性を持っている。一方、貧乏人が金持ちを対象とする革命を行うという思想は、共産党の革命イデオロギーとは一致している。政府から見れば、この劇が文芸の形で共産党の昔の革命理想を宣伝し、讃美している。したがって、共産党政権の合法性を宣伝するのにありがたいものだと考えられる。これはこの劇が上演の許可がもらえる原因の一つでもある。この劇の革命の記号は、その生存の「保護の傘」を獲得させたのである。

もう一方で、この劇は「貧乏人」の身になって「金持ち」に反対し、更に、「貧乏人が金持

ちに反対する」暴力革命の合理性と革命正当性について扇動、そして弁護をしている。現在、中国は西洋経済に影響され、貧富の二極分化問題がますます深刻になり、金持ちと貧乏人の階層分化がますます明らかになり、まさに「不公平」な社会となっている。この劇は、革命暴力を讃美し、実は、革命で平等を実現するという政治的傾向を示している。

ある評論の指摘によると、この劇は同時に、貧乏人が金持ちに対する反抗は、恐いものであり、血腥いものであるが、神聖的なものでもあると訴えている。この劇のロジックによれば、すべてが単純な方法で解決できる。「賛成者はこっちへ来い、反対者は銃を出せ」というものである。劇中で、ゲバラとその同志たちは、ややもすれば武力でもってこれを訴え、肉体や命の犠牲を惜しまなかった。彼らは反対者の意見にまったく耳を貸そうとしない。圧迫と略奪に反抗するためには、成功か失敗かに関わらず、結果を一切考えない。革命しない者には打撃を加える。この意味からいえば、『ゲバラ』はナロードニキ主義新左派、即ち急進型新左派が、革命の記号のもとに社会に登場した表現と見なすことができる。この劇は、「暴を以て暴を制す」という感情や価値観を表している。将来の中国の現実生活においては、ますます現実的な影響力を持つことが考えられる。

4. 左右思想の対抗の将来における政治的影響力

まず、指摘すべきは、今日の権威体制において、自由派、新左派、そして新保守主義という三つの思潮がすでに自主的な生存空間を有していることである。知識人によるこの三つの体制以外の思潮に対して、政府は明確な干渉は行っていない。これは中国で、思想多元化の時代が始まったことを物語っている。

その原因については、この三つの思潮が主張している価値観は、いずれも政府が強調している価値観と部分的に一致したり、重なり合ったりしていることが挙げられる。例えば、自由派は、中国の改革開放政策の実施、市場経済の推進、国際競争に積極的に参与し、経済のグローバル化の歴史的流れを迎えること、法制における世界との結びつきなどを主張している。これは政府の主張と完全に一致している。新左派は、自発的に社会主義価値と公平価値を重視し、肯定している。更に、共産党革命の歴史的貢献を強調し、社会主義的理想を追い求め、毛沢東の功績を大いにたたえている。これは政府にとって望ましいことである。紛れもなく、新左派は共産党のイデオロギー的記号を強める役割を果たしている。第三に、新保守主義は、社会体制の転換における秩序や権威の意義を重視し、そして肯定している。自由派の政治西洋化の主張を批判している。これもまた政府の賛同が得られる。この三つ思潮はいずれも政府との共通認識を持っているので、今日の中国で、自分の存在空間を合法的に有することができる。

また一方で、この三つの思潮には、それぞれ政府が主張する価値観と矛盾する部分も持っている。例えば、自由派は、西洋の価値観に賛同している点においては、政府の権威主義と矛盾している。新左派は毛沢東の平均主義に賛同しており、鄧小平によって促された中国の発展様式と矛盾している。同様に、新保守主義が権威主義の言説を使うことや、自由主義の目標に賛同することは、共産党の革命イデオロギーの表現と明らかに矛盾している。

この三つの思潮と権威を持っている政府との間の複雑で且つ相互に影響しあう関係は、中国が社会主義全体主義体制から、市場経済が多元化した後のポスト万能体制へと転換する過程で

あらわれた現象である。この意味からいえば、体制から離れた中国自由主義、新保守主義と新左派という三つの勢力が同時に存在することによって、中国の思想界は再びより多面的な構造を作り上げた。実は、この三つの思潮を基本にすれば、人々は保守から急進までの豊かなレベルの思想価値観を見つけることができるだろう。⁽¹³⁾

次に、今まで、新左派と自由派の間の論争が、大きな社会的影響を起こしていないことを認めなければならない。1990年代から今まで、社会には大きな分化が生じ、人々は自分のことに専念している。思想的理論に興味を持っている人は比較的少ない。新左派にせよ、自由派にせよ、彼らは日ごろから民衆との連絡や交流のルートがない。新左派と自由派との論争の場もインターネットや発行部数の少ない知識人の雑誌や書物に限られており、知識人の論争の聴衆は、1980年代半ばと比べるとはるかに減っている。

しかし、これが知識人の中の思想の相互交流が長期的な影響がないことを意味していない。政治的思潮は、人々の社会問題や窮境に対する挑戦が作り出した思想的な反応であることから、思想は社会における基本問題や窮境を敏感に反映し、更にそこから生まれた異なる政治的傾向が生じる。長期的に見れば、中国の民主化の推進と政治参与のルートの将来的な拡大につれて、大体において、20世紀末の知識人の思想的分化は、次のいくつかの可能性が存在する。

①政治的見通しその一：社会の多元化に対応する思想の多元化

これら三大思潮と政府との間の共通認識の存在は、権威政治の条件のもとにそれらを長期的に存在させることが可能である。三者は互いに寛大な気持ちで相手のことを認め、更に良い方向へと互いに促進しあっていけば、中国の思想の多元化がバランスよく発展していくのに、積極的な役割を果たすことになるし、また中国の民主化にも積極的な意味をもつことになるだろう。

知識人の思想分化の更なる重要な積極的意義は以下の点にある。中国の経済改革がもたらした社会階層の分化現象においてすでにあらわれているが、単純な社会多元化だけでは、中国将来の民主化のために、十分な条件が満たされているとは言えない。そして、1990年代からあらわれてきた知識人の思想の多元化が、社会の多元化とあわさることは、将来、中国の民主政治が効果的に行なわれるための必要不可欠な前提なのである。これが、知識人の思想分化の持つ重要な積極的な意義である。更に具体的に言えば、自由派は、政治改革と法律社会の建設を主張しており、新左派は、経済の平等を主張している。新保守主義は秩序の安定を主張している。三者の鼎立は、中国の政治発展に豊かさをもたらしていくに違いない。

更に具体的に言えば、この対応関係は次のようにあらわれている。新保守主義と自由派の右翼は、秩序と安定の価値を強調し、客観的には、旧官僚階級から転じた新興官僚集団と大企業集団の利益を代表している。自由派は、私有財産権、自由競争、人権の自由、法律を強調し、客観的には、新興の中産階級の利益に合致する。新左派は、過度なロマンチックな下層根性や暴力革命に対する崇拜を捨てれば、彼らが公平、平等、社会の弱者集団の利益に対する強調は、客観的には、下層民衆の利益に合致し、下層民衆に認められている。

このように、この三種類の思潮は、社会においては、いずれもそれ相応の利益集団と社会階級をあらわしている。これによって、各社会利益集団や階級が民主体制のもとで、自分の利益

と発言権を獲得しようとする時、自分の利益や価値を伝える思想や主義を手にすることができる。しかも、この思想、主義のもとに、政治党派を結成し、多元的政治党派の運営ルールに基づき、自分自身の利益や権利を獲得することができる。これによってはじめて、本当の意味でも中国の多元化民主に、社会的条件と思想的条件が備わる。この意味では、現在の中国の知識人の思想分化は、相互認可と相互理解のもとに、相互に促進しあえば、中国が将来、民主政治に積極的な役割を果たすに違いない。

自由派の穏健型と新権威主義とが互いに結びつき、中流階層の利益の思想的基礎をうちたてた。この思潮は、現存の秩序との間に良性の相互促進を行うという関係がある。体制内の漸進的な民主化変革を支持し、次第に体制内に入りつつある。中国が権威主義から社会主義民主体制への移行の中で、積極的な役割を果たしている。

②政治的見通しその二：左派とマージナルな階層との結合の可能性

理論から推断するに、中国の発展には、もう一つの可能性が考えられる。近代化の過程において、重大な危機や断裂がおこり、社会の矛盾の爆発を引き起こすことになると、急進型の新左派はナロードニキ主義のイデオロギーから出発して社会矛盾を解釈し、中国の問題を資本主義の略奪性による両極分化と理解するだろう。そして、再び 20 世紀初期のように、平均主義的社会主義の確立によって、社会の全体的な矛盾を解決することを要求するであろう。このような状況下で、近代化の過程における利益喪失者、絶望者階層や下層民衆にとっては、経済上の貧困化によって、最も受け入れやすいのは自由派の民主自由の観点ではなく、新左派平均主義の公平の観点であろう。この過程においては、新左派の穏健派、即ち「ポストモダニズム」派は、下層民衆の利益とはあまりかかわりがないので、その社会的影響を次第に失っていくことが予想できる。ところが、新左派のナロードニキ主義派は、絶望階層となる下層民衆を呼び寄せる可能性がある。ナロードニキ主義新左派は、ポール・ポトと同じように、中国で、「邪悪な金持ち」を反対する革命を起こし、中国では、極力搾取のない理想的な公平の世界をつくらうとするだろう。このようなユートピアの実験が国民に悲劇をもたらすにほかならないことは、すでに 20 世紀の歴史によって明らかになったにもかかわらず。

しかし、現在の中国社会の発展状況からみれば、このような状況になる可能性が極めて低い。その原因は、まず、20 世紀初期と同じような各方面の条件がそろっていないことが挙げられる。21 世紀は、すべての信仰とイデオロギーが消失し、俗化された世紀である。新左派は、知識人や社会民衆の中で、大きな影響力を持つのが極めて難しい。次に、現在の状況では、国家政権には、事態の悪化を抑制する能力が十分ある。中国経済の急速な発展や各階層の生活レベルの向上、及び執政の合法性の強化などによって、中国社会において、近代化の断裂が起こる可能性はさほど高くないと考えられる。

③政治的見通しその三：ナロードニキ主義と権威主義の二極への動揺

最後に、三つ目の見通しが考えられる。それは、ナロードニキ主義と権威主義の二極への動揺の可能性である。

もし中国のポスト・全体主義権威体制 (Post-totalitarian Authoritarian Regime) が自己

更新によって秩序の整えた民主を実現できなければ、権威主義の腐敗のため、現行の体制が将来のある時期において深刻な危機にさらされる可能性が高い。危機に陥った政権者は往々にして、民間の日増しに強くなる民主化の要望に応えるようにし、それによって国民の自分の合法性に対する承認を求める。このような状況下で、中国は社会全体において、民主化のうねりが急激に盛り上がることになるだろう。しかし、この背景で実現した民主化は、ナロードニキ主義的の民主と権威主義の鉄腕政治が交替するという不安定な局面になる可能性がある。

中国ナロードニキ主義型民主化が作られるメカニズムはまず、権威政治の腐敗や貧富の二極分化によって、社会全体という広範囲にわたって権威嫌悪の感情を引き起こすことになる。こういう場合、新左派が、「金持ちの財産を奪い、貧乏人を救済する」というナロードニキ主義の平等主義を主張することは、まさに民衆が権威政治の腐敗に対する反逆の気持ちに迎合している。それで、イデオロギー的言説において優位を占め、しかも、輿論を支配することになる。

次に、中国文化においては、長期にわたって、自由主義の個人自律の精神や伝統、及び法律に対する尊重に欠けている。それで民主は、専制に対する反対であり、民衆の意志と願望の直接的な反映であるという偏った見方で理解されている。ナロードニキ主義の高い福利、高い就業率という平等主義は、社会民衆の普遍的な要望となる。⁽¹⁴⁾

このような普遍的な要望に応えるエリート政治家だけが、一人に一票という選挙で得票を獲得することができる。したがって、政治家は権力を握るために、極力、民衆の近視眼的な経済的要望に迎合し、しかもそれによって政策や方針を定めることになる。その結果、このような「金持ちの財産を奪い、貧乏人を救済する」という主義が、中国に中南米各国で起こった問題を再びもたらすことが予想される。

具体的にいえば、知識人の左翼化、エリート政治家の俗に媚びる傾向、及び腐敗したエリート政治に長い間圧迫された民衆の平等主義に対する願望、これら三つの要素の結合で、ナロードニキ主義の政治的な流れをつくることになる。健全で多元的な自由主義の民主政治は、権威主義の危機が訪れた後に直接に実現することが不可能であり、民主化のプロセスにおいて、ナロードニキ主義の「プレート型」の民衆政治におのずと変化していくことになる。実際は、近代以来、中国にはもはやナロードニキ主義の温床がなされている。⁽¹⁵⁾

このようなナロードニキ主義政治は、中南米各国の近代化のプロセスにおいてはすでに珍しいものではないのである。これらの国では、労働者組合や左翼政党の指導する、賃金の引き上げや福祉の改善を目的とするストライキやデモが相次ぎ、その政治的要望がきわめて高い。このような状況で、弱い政府は得票や存続のために、このような要望に譲歩せざるをえなかった。その結果、非現実的な福祉政策、財政赤字、急激なインフレ、巨額な外債などさまざまな問題を引き起こした。民衆によって選ばれた政府が現実的な経済問題に対応できず、政権の権威もまったく無に等しい。そして、暴力犯罪の問題がますます深刻になり、ヤミ社会は無法状態となった。都市の管理が混乱し、スラムがいたるところにできる。政府には、合法性の権威と十分な力に欠けているため、邪悪の抑制、秩序の維持、社会に対する効率的な管理を実現することができないのだ。

中国の発展が一旦この窮地に陥ってしまえば、新左派が更に大きな役割を果たすことになる。前にも述べたように、中国の急進左派は、ナロードニキ主義の強い価値傾向を持っている。彼

らの「下層意識」、反知識人の感情、反西洋の価値傾向、「耽美」的なユートピア社会主義への執着、『チェ・ゲバラ』という劇にあらわれた「金持ちの財産を奪い、貧乏人を救済する」という平均主義の価値観、ジャコバン主義（Jacobins）に対するロマンチックなあこがれ、「貧乏人が善良で、金持ちが邪悪だ」という二極分類、これらの価値観や発想が、現在の中国新左派の考えには十分にあらわれている。一方、『チェ・ゲバラ』が知識人や学生の中で起った大きな衝撃からみても、ナロードニキ主義の中国における広範な社会基盤が明らかにみてとれる。

一旦、ナロードニキ主義の「金持ちの財産を奪い、貧乏人を救済する」という運動が起こると、もう一部分の中国知識人が保守的な権威主義に傾くことが予想できる。彼らは鉄腕式のエリート政治に戻ることを主張し、政治的な安定を図るために、軍事的権威政治のナロードニキ主義に対する鎮圧を支持し、左翼のナロードニキ主義と対立する新右翼となる。その結果、ナロードニキ主義の民衆政治と権威主義のエリート政治との両方で、振り子のような二極への動揺のモデルが形成される可能性がある。中国は中南米各国がかつて経験した政治的な落とし穴にはまることになる。発展の現状からみれば、中国はポスト全体主義の権威政治のもとに、全体的に見ると経済の発展状況は順調であり、政府が大きな社会問題をより効率的に解決しているので、上述したような中南米の窮地に陥る能性は高くないと考えられる。しかし、このような中南米の二極への動揺に関わる要素と条件は、現在の中国にもまだ存在している。本論文は中国に現存する新左派の思潮に対し、分析と批判を行い、中国では近代化の断裂が起こらないよう警鐘をならすものである。

【注釈】

- (1) 1980年代の半ば頃、筆者は他の論文で次のような楽観的な意見を述べた。「近代以来、中国は今の時代のような時期はかつてなかった。生きている三世代の人々が、中国で絶対に変革を行わなければならないという点でこのような一致を遂げた。一つの民族にとって、政治観念において、ここまで一致していることは、非常に明るい将来が期待できる。なぜなら、それ以外の政治選択が存在しないからである。我々は先人を慰め、後世の人々を羨ましがらせるという歴史的責任を担っている」と。このような楽観的な判断は、まさに当時中国の知識人が思想観念や価値態度における空前の一致という状況に基づいて下したのである。
- (2) このような民主観を「汎道徳主義的解放民主主義」と呼んでもいい。この思潮からみれば、民主政治はどんなところにも当てはまる秩序制度である。民主の実現には社会的条件がなくても良い。民主に反対するのは、道徳上邪悪であるか、政治的には利己的である。不道徳や邪悪の力に対しては、妥協のない闘争によってはじめて民主の勝利を獲得することができる。長期にわたって人々の頭に深く入り込んだ革命の意識状態の深層的考え方も、知識人のこのような汎道徳主義思潮の生まれにも影響を及ぼしている。革命のイデオロギーからみれば、「プロレタリア階級が失ったのは圧迫と束縛だけで、その代わりに、獲得したのは、全世界である」。これにも、道徳主義的的思想的ロジックを含んでいる。
- (3) 蕭功秦「新权威主義：痛苦的两难选择（新権威主義：苦痛に富む板挟みの選択）」『文汇报』、1989年1月17日を参照。また、蕭功秦問答記録「大陸新保守主義の崛起（大陸新保守主義の出現）」を参照。台湾『中国時報週刊』、1991年1月26日。新権威主義が中国での誕生についての文献は、劉軍、李林編集『新权威主義（新権威主義）』、北京経済学院出版社、1991年。齊墨編集『新权威主義：对中国大陆未来命运的论争（新権威主義：中国大陸の未来の運命についての論争）』、台湾唐山出版社、1991年を参照。
- (4) 蕭功秦「世紀之交中国各阶层政治态势及前景展望（世紀末中国各階層の政治態勢及び前景についての展望）」『战略与管理』、1998年第五期を参照。
- (5) 以上の観点については何清漣『我们仍然仰望星空（我々は依然として星空を見上げている）』、漓江

- 出版社、2001年出版を参照。
- (6) 1994年、筆者は北京で、アメリカで留学して帰ってきた経済学の博士と知り合った。彼は次のような観点を明らかに打ち出した。「改革というのは、資本家の搾取を受け入れることであり、開放というのは、帝国主義植民主義の搾取を受け入れることである」と。この意見は単純すぎるし、極めて偏っているが、新左派の価値傾向をはっきりと表している。
- (7) 新左派で活躍している人物としては、汪暉、李陀、王小東、崔之元、韓毓海、曠新年などが挙げられる。
- (8) 張寛「薩伊德的‘東方主義’与西方的汉学研究(サイドの「オリエンタリズム」と西洋の漢学研究)」(『了望』1995年第27期)を参照。本論文に出てくるサイドの思想に関する概括は張氏の論文に基づいたものである。
- (9) 同上
- (10) 1990年代後期以来、インターネットが中国で迅速な発展を遂げ、新左派は主張発表の場所を持つようになってきた。彼らはインターネットで次のような意見を発表した。例えば、左翼思潮は資本主義市場化の時代においては特別な意義を持っている。「グローバル化は人類の宿命だ」という主張に反対し、「貿易の自由は最高の価値だ」という意見にも反対している。彼らはこう考えている。「自由貿易のロジックにおいて、受益者と被害者の間にはますます広がっていくギャップが存在している。金持ちの財産の積み重ねは、プロレタリア階級を社会からつまはじきにするか、プロレタリア階級の貧困化を代価にしている。先進国の経済拡張は、途上国の自然資源の破壊や莫大な債務負担を代価にしている」と。彼らは、マルクスが19世紀半ばに資本主義に対する次の訴えをもって、絶えず人々に注意を呼びかけている。「資産階級の社会においては、資本には独立性と個性をもっているが、生きている個人個人には、独立性と個性をもっていない」、「人と人の中には、赤裸々の利害関係のほか、残酷無情の「現金のやり取り」のほか、何のかかわりもない…人の尊厳は、交換価値に変えられた」。良心の伴っていない貿易自由で、特許された自由や、自力で獲得した自由が無数取り替えられた。彼らから見れば、生命の意義は、個性の解放にあり、自己の実現にある。マルクスには次のような夢を持っていた。資産階級の古い社会に取って代わるのは、新しい連合体であり、「そこにおいて、個人の自由発展は、すべての人が自由に発展する条件である」など。
- (11) ゲバラは左翼革命の強いシンボリックな意味を持った歴史的人物である。キューバ革命が勝利を勝ち取った後、彼はキューバ国家銀行の頭取に任命され、貨幣廃除という急進的な政策をつくり、強制的な義務労働を国民に要求していた。社会主義の道を歩むキューバにとって、このような方法で経済を発展すべきだと彼が主張し、それに、怠け者を戒めるため、遠く離れた収容所に送るべきだとも主張している。彼の主張した政策が実行されれば、彼はポル・ポトのような人物となるに間違いはない。後にポル・ポトがクメールで供給制を実施し、貨幣を廃除し、都会と商店を除去し、「ただで食わない」運動など人種消滅の犯罪的な行為を行った。これらは、ゲバラの考えを引き継いでいると言える。ゲバラの極端に左翼的な政治傾向は、キューバ党内でカストロの反対にあった。ゲバラはカストロと政治方針が合わないのを、断然としてカストロから離れ、再びボリビアのジャングルに入り、ゲリラ戦に身を投じ、ある戦いで左翼理想のために命を捧げたのだ。
- (12) 劇『チェ・ゲバラ』は、市場経済の世俗化風潮に反抗するロマンチックな理想主義精神に溢れている。この劇は、ゲバラに表れた正義、平等を中心とする左派の原則を訴え、中国がグローバル化や市場化、そして世俗化の歴史的な道路を選択したことが間違いだったと主張している。作者の黄紀蘇は筆者と討議をしていた時、次のような意見を述べた。計画体制の社会主義の失敗は、社会主義の価値の永久性には何の影響もない。ユートピアにはその存在価値を有している。彼の心に描いていた未来の理想的な社会は平等で、搾取や競争がなく、人道に溢れた社会である。より人道的な生活を追求しようとするならば、四千年もの歴史で証明されてきた適者生存の法則に背かざるをえない。劇に登場する肯定的な人物は、皮肉な口調で「金持ちになる先頭軍」や「古い世界の移民申請書」などを批判している。このような新左派の社会主義価値観は、市場経済の世俗化やグローバル化の風潮において、反潮流の意味合いを持っている。事実、多くの観衆がゲバラの訴える価値観や生活の原則を認めている。ある若い観衆が次のように述べた。「この劇は正義と邪悪の勝負を表している。いつになっても、不平等や圧迫が正義のあらわれを妨げることができない——これは大きな啓発となっており、しかも永遠に生きつづけるのである」と。これが新左派が若者をひきつける魅力的なところなのである。
- (13) 1990年代後期以来の中国知識人思想の分化状況を説明するために、筆者は、中国思想界で活躍している政府筋以外の代表人物の思想を分析し、保守的から急進的へと次のように順をつけた。新保守主義あるいは新権威主義(蕭功秦、康曉光など)、自由主義右翼(張維營、歴以寧など)、自由主義中間派(朱学勤、余世存、余傑など)、自由主義派(何清漣、秦暉)、社会民主主義(楊帆、胡鞍鋼)、新左派穏健派(甘陽、崔之元、王紹光など)、新左派急進派(黄紀蘇、張広天、曠新年)などである。具体的な環境や個人的な思想は絶えず変わっているので、この順は相対的な意義だけ持っている。自由派の中間派の主な代表人物の朱学勤の思想はだんだん右翼化しており、蕭功秦の思想も近年、新保

- 守主義から自由派の方向へと変化している。
- (14) 許向陽、「“拉美化”的病源在于民粹主义(「中南米化」の根本的原因是ナロードニキ主義にある)」、
関天茶社網、2003年9月9日14時発表。
- (15) 民国成立以来の早期近代化のプロセスにおいて、中国のエリート政治には腐敗の勢力が存在している。二極分化が背景とした金持ちの無情さ、社会の不公平、権力を持った階級と成金階級との結合、これらの要素は往々にして左翼的な平等主義思潮の発展の温床をなしている。その結果、左翼的な政治理念が必然的に民衆にとってますます魅力的なものとなっていく。20世紀初頭、左翼知識人によって行われた「金持ちの財産を奪い、貧乏人を救済する」ことを目的にした「無頼漢運動」が、明らかにナロードニキ主義の特徴を持っている。20世紀初頭中国知識人の左翼化が20世紀における中国政治の重要な特徴である。

(邦訳 中西千香)